するものである．監修をされた仏教大学の香西豊子さんは，『流通する「人体」―献体・献血・臓器提供の歴史』を2007年に，また最近は『種痘という〈衛生〉：近世日本における予防接種の歴史』（2019）を上梓された気鋭の医史学者である．

歴史上の医学や医療についての深い研究も大事ではあるが，独りよがりに陥るリスクもない訳ではない．世の多くの人に医学史の知見を伝えることも，医史学者の大切な仕事だと思う．

（坂井　建雄）

［いろは出版，〒606-0032 京都市左京区岩倉南平岡町74番地，TEL. 075（707）1168，2021年12月，A5判，192頁，1,500円＋税］

書籍紹介

香西豊子 著
『種痘という〈衛生〉――近世日本における予防接種の歴史――』

本書は，先行する種痘史研究・資料を，著者独自の視点から再検討・再構成したものである．研究蓄積の厚い在村蘭学やそれぞれの地域の医師たちの役割があまり視野に入っていない点は残念であるが，池田家の分析をすすめるなど従来の種痘史研究にない視点があり，「種痘の歴史」は単なる「新しい医療技術の輸入の歴史」ではないことに気づかせてくれる著作といえよう．

なお，本書の内容の詳細な検討については，本会会員の海原亮による精緻な書評が存在し（『歴史評論』848号，2020年12月），そのなかで海原が既に本書の議論の分かれる部分をひとつひとつとりあげ網羅的に分析しているので，そちらを参照されたい．

ここでは，以下に目次を紹介しておくに留める．

序章　「日本に於ける疱瘡の沿革」を記述する
　第一節　鷗外の追憶，京水の幻影
　第二節　種痘という〈衛生〉
　第三節　本書の構成
第一章　疱瘡の病像
　第一節　疱瘡の歴史的現在
　第二節　日本列島における疱瘡像
　第三節　疱瘡の「地方」的展開
第二章　疱瘡の医説
　第一節　医と「天命」
　第二節　人痘種痘術の実践
　第三節　命題「八丈島無痘説」
　第四節　断毒の目論見
　第五節　治痘の究竟
第三章　種痘針の政治学
　第一節　国土と人別
　第二節　牛痘の「取寄」と分配
　第三節　「百分の一」の倫理
　第四節　幕末蝦夷地の強制的「全種痘」
終章　あばた面の近代

（松村　紀明）

［東京大学出版会，〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29，TEL. 03（6407）1069，2019年12月，A5判，676頁，8,800円＋税］